

史料にみる溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄

木村 健明

1. はじめに

茨木市内には多くの埋蔵文化財包蔵地が周知されており、いたる所で中世の遺構が検出されているといっても過言ではない。また文献史料では、市内に多くの荘園が存在したことが確認できる。

本稿ではそれらの内、溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄を対象として史料の集成を行った（註1）。

2. 「荘園」以前（表1・註2）

荘園として史料に現れるのは12世紀後半からであるが、溝杭・沢良宜についてはそれ以前から関連する史料が認められる。

史料1・2は「三嶋別業」に関する史料である。所在地として東奈良遺跡周辺が考えられている（註3）。

史料3は藤原鎌足の功田の施入に関するものである。地名は記されていないが、史料15に見える各荘園の面積の合計が功田の総面積とほぼ等しくなることから、これらの荘園が「鎌足功田」に由来するものと考えられている（吉川2009・2024）。史料1～3からは、藤原氏が茨木市域に拠点を持っていたことが窺える（註4）。

表1 関連史料一覧（～久寿2年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宜	新屋	文献	出典	備考
1	舒明天皇の始め	—		藤原鎌足、良家の子女に錦冠を授けようとしたのを固辞し、三嶋別業へ去る		『藤氏家伝』上巻 鎌足伝	沖森ほか1999	三嶋別業
2	皇極天皇3年	正月乙亥 条		藤原鎌足、神祇伯を固辞し、三嶋へ去る		『日本書紀』巻24	『日本書紀』後篇	三嶋別業
3	天平宝字元年 (757年)	閏8月 壬戌	藤原仲麻呂が藤原鎌足の功田100町を維摩会料として興福寺に施入する			『続日本紀』	『続日本紀』3	鎌足功田→興福寺
4	康平7年 (1064年)	9月16日	前下野守源頼資 佐渡へ配流する			『扶桑略記』第29	『扶桑略記 帝王編年記』	溝杭氏
5		10月16日				『清辨眼抄』	『群書類従・第7輯』公事部	
6		12月5日	源頼資の配流先を土佐へ変更する			『扶桑略記』第29 『清辨眼抄』	『扶桑略記 帝王編年記』 『群書類従・第7輯』公事部	
7	治暦2年 (1066年)	7月2日	源頼資の流罪を免除する					
8	寛治6年 (1092年)	6月22日		僧定尊、珍皇寺垣尻の田畠を源師行所持の沢良宜村の田と交換する		平安遺文1308 「僧定尊田畠売券案」	『平安遺文』 古文書編第4巻	
9	興和四年 (1103年)	3月				平安遺文1472 「左衛門尉源師行解案」		
10		3月6日		珍皇寺と源師行の間で争論があり、源師行に沢良宜村の領有が認められる		平安遺文1473 「修理大夫某書状」		
11		3月				平安遺文1474 「東寺政所下文案」		
12	仁平6年 (1152年)	8月16日		沢良宜村住人伴助□と妻の王氏が書写する		大門寺一切経784	大和郡山市教育委員会1984 榎本2010	
13		8月21日		沢良宜村蓮花寺住僧		大門寺一切経755		
14	久寿2年 (1155年)			沢良宜村大中臣是久と妻甲可氏が書写する		大門寺一切経783		

史料4～6は溝杭氏の祖とされる源頼資に関する史料である。頼資の子である源資兼が「外家の所領（註5）を相伝することによって、摂津国溝杭に住し、溝杭大夫」と称したとされる（『尊卑分脉』）。

史料8～11は珍皇寺（京都市）と源師行との間で起こった「沢良宜村の田」に関する相論の史料である。これが「沢良宜村」の初出である。

史料12～14は12世紀半ばに書写された大門寺一切経に沢良宜村の住人が協力していたことを示す史料である。

3. 平安時代～鎌倉時代の様子（表2）

溝杭庄としての初見は史料15で、興福寺維摩会の不足した費用を補填するために出された史料である。少なくともこれ以前から興福寺領であったことが分かる。

一方、建久3年（1192年）には後白河院庁下文に「御祈願所清浄心院領溝杭」が認められ、この時点には、院領の溝杭庄が存在したことが分かる（史料16）。興福寺領の存在も確認できるため（史料17など）、同じ「溝杭庄」であっても領主

表2 関連史料一覧（承安3年～元徳3年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宜	新屋	文献	出典	備考
15	承安3年 (1173年)	8月15日	興福寺が維摩会料不足を補填のために提出した勘文に溝杭庄・草和良宜（沢良宜）村などがみえる			『維摩会引付』 「興福寺維摩会不足米勘文案」	吉川2004	興福寺領
16	建久3年 (1192年)	3月	後白河院庁が高階米子家領の荘園に国役負担や諸人の妨げがおよぶのを停止する中に「御祈願所清浄心院領溝杭」が認められる			鎌倉遺文584 「後白河院庁下文案」	『鎌倉遺文』 古文書編第2巻	長講堂領
17	正治2年 (1200年)	—	興福寺維摩会に際して溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄などが薦を負担する			鎌倉遺文15590 「興福寺維摩会不足米餅等定」	『鎌倉遺文』 古文書編第20巻	興福寺領 弘安8年(1285年)書写
18	安貞頃 (1227～1229年)	6月1日	興福寺、関東下知状を別会所に移管したが、溝杭庄については文書を欠く			524「都維那範厳書状」	『春日大社文書』第2巻	興福寺領
19	寛元4年 (1246年)	—	宣陽門院が鷹司院に譲った所領の中に溝杭庄が認められる			鎌倉遺文3274 「宣陽門院所領目録」	『鎌倉遺文』 古文書編第5巻	長講堂領
20		4月13日		弘井庄と沢良宜庄を年預康房に与える		『岡屋閑白記』	『岡屋閑白記』	近衛家領
21	建長5年 (1253年)	—		近衛家所領の目録に庄務進退所々として沢良宜庄・福井庄が認められる		鎌倉遺文7631 「近衛家所領目録」	『鎌倉遺文』 古文書編第10巻	近衛家領
22	弘長元年 (1261年)	8月2日		尼によしんが沢良宜村の田をしゃうふつうに譲渡する		勝尾寺文書223 「尼によしん田地譲渡状」	『箕面市史』 史料編1	
23	弘長2年 (1262年)	6月1日	寺領・年中行事に溝杭庄・沢良宜庄が認められる			『略安宝集』弘長二年六月一日沙汰次第	国立公文書館デジタルアーカイブ・吉川2024	興福寺領
24	弘長3年 (1263年)	10月18日		沢良宜村の大進御坊名田の直銭請取状		勝尾寺文書228 「某所当米并直銭請取状」	『箕面市史』 史料編1	
25	文永2年 (1265年)	—	藤原実経が春日参詣をした際に、沢良宜庄・溝杭庄・新屋庄などに入夫を割り当てる			9372「興福寺入夫召注文」	『鎌倉遺文』 古文書編第13巻	興福寺領
26	文永4年 (1267年)	—			蓮阿弥陀仏が新屋村の田などを勝尾寺に寄進する	勝尾寺文書245「比丘尼蓮阿弥陀仏田地寄進状」	『箕面市史』史料編1	
27	弘安3年 (1280年)	3月			東北院領新屋庄雑掌が造興福寺段米に難渋する荘民への譴責使の派遣を求める	鎌倉遺文13899 「摂津新屋庄雑掌申状」	『鎌倉遺文』 古文書編第18巻	九条家領
28	正応3年 (1290年)	12月			某寺修理用途が新屋庄などに割り当てられる	鎌倉遺文17514 「某寺修理用途支配注文」	『鎌倉遺文』 古文書編第23巻	興福寺か？
29	永仁6年 (1298年)	6月1日	春日若宮祭の流鏑馬の諸庄負担と担当について弘長2年(1262年)を参考にし、溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄・味舌庄が目代正弥に宛行う			208「興福寺年中行事」	『吹田市史』第4巻	興福寺領
30	嘉元3年頃 (1305年)	—			摂関家長老が管理する荘園に東北院領新屋庄が認められる	鎌倉遺文22196 「摂録渡目録」	『鎌倉遺文』 古文書編第29巻	九条家領
31	徳治3年 (1308年)	7月3日	溝杭庄を都維那琳乗に宛行			『興福寺三綱補任』第4輯下補任部	『続群書類従』第4輯下補任部	
32	文保2年 (1318年)	3月21日		興福寺公文所が沢良宜庄へ三方神人を下すことを下知する		千鳥氏文書 吹田市史4巻	『吹田市史』第4巻	
33		8月23日	興福寺秋季八講初日の追物を沢良宜庄・溝杭庄・新屋庄などが負担する			「秋季御八講初日追物支配事」『文保三年記』	石附2011	興福寺領
34	元応元年 (1319年)	9月	興福寺大垣修理を沢良宜庄・溝杭庄などに割り当てる			「支配 大垣修理事」『文保三年記』		
35		11月1日	興福寺慈恩会の追物を新屋庄・沢良宜庄・溝杭庄などに割り当てる			「来十三日慈恩会追物支配事」『文保三年記』		
36	嘉暦元年 (1326年)	11月16日				鎌倉遺文29654 「六波羅御教書案」	『鎌倉遺文』 古文書編第38巻	溝杭氏
37	嘉暦2年 (1327年)	8月5日	六波羅探題より溝杭孫三郎らが垂水荘の悪党討伐を命じられる			鎌倉遺文29915 「六波羅御教書案」		
38	元徳3年 (1331年)	4月28日				鎌倉遺文31420 「六波羅御教書」		

の異なる荘園が存在したことが分かる。

沢良宜庄は史料15以降、興福寺領として認められるが、近衛家領（史料20）や『勝尾寺文書』に「沢良宜村の田」の存在も確認できる（史料22・24）。

新屋庄は興福寺領として溝杭庄・沢良宜庄と共に現れることが多い。その他に、東北院領（後に摂関家領）（史料27・30）、勝尾寺領（史料26）なども確認できる。

溝杭氏は鎌倉時代末期に六波羅探題より垂水荘（吹田市）の悪党討伐を命じられており（史料36

～38）、鎌倉幕府の畿内御家人として活動していたようである。

4. 南北朝・室町時代（14世紀）の様子（表3・4 史料39～74）

室町時代に入ると史料数が増加するが、記述の都合で便宜的に14世紀で区切った。

興福寺領の溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄については、その知行を三綱を務める僧侶へ宛行っている（史料63・65など）。また、各種行事に伴う費用もそれぞれ賦課されている（史料100など）。

表3 関連史料一覧（建武元年～応永5年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宣	新屋	文献	出典	備考
39	建武元年 (1334年)	8月		浄土寺領高山庄などに乱入した勝尾寺僧に近衛殿領沢良宣などに居住する者が認められる		勝尾寺文書574～583	『箕面市史』史料編2	近衛家領
40	建武3年 (1336年)	夏頃	本願寺覚如、溝杭辺に下向し、翌年春頃帰洛する			『常楽台主老衲一期記』	『真宗史料集成』第1巻	本願寺
41	興国2年 (1341年)	5月26日	南朝、河内河合寺に祈祷料所として溝杭守里を充てる			「河合寺文書」	『大日本史料第6編之7』	補遺第6編之6
42	暦応5年 (1342年)	—			九条道教が引き継いだ東北院領に新屋庄が認められる	『九条家文書』25「撰録渡荘目録」	『九条家文書』1	九条家領
43	康永4年 (1345年)	7月14日	嶋下仕女が小俵十俵を納入する			『師守記』	『師守記』第3	大炊寮領
44		10月7日	溝杭沙汰人が参入し、河川二段分の損免を沙汰していないと報告する					
45	貞和元年 (1345年)	10月7日	大炊寮領溝杭御稲田の沙汰人が河川損により年貢免除を申し出るが認められない					
46	貞和5年 (1349年)	11月		「散在賦紙袋米銭上帳事」、「諸方馬引代銭事」に「沢良宣」が認められる		勝尾寺文書661「鳥居造立条々注文」	『箕面市史』史料編2	
47	14世紀 中頃か	—	足利尊氏が溝杭庄を唐招提寺に寄進したとする			『招提千歳伝記』 巻下之三 封禄篇	『続々群書類従』第11宗教部	唐招提寺
48	貞治元年 (1362年)	11月10日	左近太郎が上洛し、来月10日に再び下向し、溝杭御稲供御米を催促することについて報告する			『師守記』	『師守記』第6	大炊寮領
49		12月9日	嶋下の仕女来年の沙汰公事物を国村に宛賜うことを父国尚が望んでいることを伝える					
50		12月11日	摂津の争乱により嶋下郡に所在する大炊寮領御稲田から神今食の供御物などが沙汰されない					大炊寮領
51		12月13日	溝杭御稲を故了源房後家に御教書を下して安堵する					
52		12月16日	溝杭御稲の年貢について沙汰を命じる					
53		12月17日	摂津国の争乱により嶋下仕女、供御を沙汰できない					
54	14世紀 中頃	6月13日	溝杭庄小田の前年度の年貢が納められたことを前雅楽頭へ伝える			『師守記』 貞治3年4月条紙背文書	『師守記』第7	
55	貞治2年 (1365年)	9月25日	溝杭村明教本尊絵の外題を記す			『存覚袖日記』42	『真宗史料集成』第1巻	本願寺
56	貞治3年 (1364年)	5月12・15日	左近太郎、12日に嶋下御稲田に神事物の催促をするために下向。15日に上洛する			『師守記』	『師守記』第7	大炊寮領
57		8月5・6・8日	5日に源次郎、嶋下御稲田に八月の毘沙門講用途と六月の庚申用途の催促を行う。8日に帰京し収納されはじめる				『師守記』第8	
58		9月1日	左近太郎、嶋下御稲より上洛する。先月毘沙門講用途を催促し、目代より進上される					
59	貞治6年 (1367年)	7月14日	嶋下分の小俵が届いていない			『師守記』第10		
60		9月12日	嶋下御稲田の仕女、役夫工米の納入に公方御年貢を流用してくれるように乞う					
61	永和3年 (1377年)	8月12日	溝杭庄を都維那大法師泰尊に宛行う			『興福寺三綱補任』	『続群書類従』第4輯下補任部	興福寺領
62		12月27日	溝杭庄を権寺主大法師泰尊に宛行う					
63	康暦元年 (1379年)	8月15日	溝杭庄を都維那法師榮実、沢良宣庄を権寺主良乗に宛行う					
64	永徳3年 (1383年)	4月15日		沢良宣庄を権上座法橋宴寛に宛行う				
65	至徳2年 (1385年)	2月28日			興福寺寺務、寺領新屋荘を春日権神主に給付する	『至徳二年記』	『続群書類従』第2輯上神祇部	
66	至徳3年 (1386年)	5月		沢良宣庄を権寺主良乗に宛行う		『興福寺三綱補任』	『続群書類従』第4輯下補任部	
67	至徳4年 (1387年)	1月28日		沢良宣庄を都維那嚴寛に宛行う				
68	康応2年 (1390年)	3月12日	溝杭庄を権寺主良乗、沢良宣庄を都維那榮舜に宛行う					
69	応安4年 (1397年)	正月12日	溝杭庄を権寺主大法師泰実に宛行う					
70	応安6年 (1399年)	12月28日		沢良宣庄を都維那法師良乗に宛行う				
71		12月29日	溝杭庄を寺主良乗に宛行う					
72	応永2年 (1395年)	12月2日		沢良宣庄を都維那定寛に宛行う				
73	応永5年 (1398年)	3月		沢良宣庄を寺主良乗に宛行う				

表4 関連史料一覧（応永5年～寛正3年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宜	新屋	文献	出典	備考	
74	応永5年 (1398年)	6月25日	寺領溝杭庄の知行を若狭寺主御房、寺領沢良宜庄を信乃都維那御房に宛行う				『東院毎日雑々記』	『大日本史料』第7編之3	興福寺領 応永5年6月2日の項に掲載
75	応永9年 (1402年)	5月6日	溝杭庄を権寺主厳寛、新屋庄を都維那淳乗、沢良宜庄を来迎院僧正孝憲に宛行う			249「応永九年記」	『吹田市史』第4巻	興福寺領	
76		6月1日	溝杭庄を権寺主厳寛に宛行う			『興福寺三綱補任』	『統群書類従』第4輯下補任部		
77	応永14年 (1407年)	3月	庁分として溝杭庄がみえる。ただし、年貢未定とされる				『長講堂領目六』	『大日本史料』第7編之8	長講堂領史料番号13と関連か
78	応永15年 (1408年)	10月25日	室町幕府、御祈禱料所溝杭土井跡などに内宮役夫工米は京済のため、国からの催促停止を守護代に伝える			46「室町幕府奉行人奉書案」	榊木2014	御祈禱料所溝杭土井跡	
79		10月27日	摂津守護細川満元、溝杭庄の役夫工米についての決定を伝える			47「摂津守護細川満元奉行人奉書案」			
80	応永20年 (1413年)	1月17日		沢良宜庄を都維那法師榮秀に宛行う		『興福寺三綱補任』	『統群書類従』第4輯下補任部	興福寺領	
81	応永21年 (1414年)	5月3日	溝杭庄を権寺主法橋良寛に宛行う						
82	応永22年 (1415年)	12月27日	溝杭庄を寺主法橋良寛に宛行う						
83	応永26年 (1419年)	5月19日	溝杭庄を寺主法眼良寛に宛行う						
84	応永27年 (1420年)	10月29日	中原康富、隼人司領溝杭庄の年貢について入谷入道に催促する			『康富記』	『康富記』1	隼人司領	
85	応永29年 (1422年)	2月9日	溝杭庄を寺主法眼良寛に宛行う			『興福寺三綱補任』	『統群書類従』第4輯下補任部	興福寺領	
86	応永31年 (1424年)	6月1日	溝杭庄を寺主法眼良寛に宛行う						
87	応永32年 (1425年)	12月27日	溝杭庄を寺主法眼良寛、沢良宜庄を都維那法師玄兼に宛行う						
88	応永33年 (1426年)	2月28日	溝杭庄を寺主法眼良寛に宛行う						
89		—	溝杭庄を法眼良寛に宛行う		新屋庄を寺主厳乗に宛行う	『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』1	興福寺領 康正3年(1457年)正月25日条	
90	永享3年 (1431年)	—	溝杭庄を懷尊、沢良宜庄を祐時に宛行う。新屋庄は不知行						
91	永享4年 (1432年)	6月13日	足利義教が武田刑部少輔入道に大館上総入道が知行していた溝杭庄を宛行う			『溝済准后日記』	『統群書類従』補遺1「溝済准后日記（下）」	大館氏→武田氏	
92	嘉吉元年 (1441年)	12月	溝杭信幸が所々に散在する所領や名田畠を嫡子信実譲る			262「溝杭信幸讓状」	『大日本古文書家わけ4ノ1』	溝杭氏	
93	文安6年 (1449年)	7月14日	隼人司領溝杭庄より妻などが入谷入道より納められる			『康富記』	『康富記』3	隼人司領	
94	享徳2年 (1453年)	12月12日	陰陽頭土御門有季が知行する溝杭庄内土井跡などへ内宮役工米の徴収を停止する			57「室町幕府奉行人連署奉書案」	榊木2014	御祈禱料所溝杭土井跡	
95	康正2年 (1456年)	5月12日	溝杭庄を寺主寛貞に宛行う			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』1	興福寺領	
96	康正2年 (1456年)	5月30日	伊勢因幡入道は段銭二貫文を賦課される			「康正二年造内裏段銭并国役引付」	『群書類従』第28輯雑部	伊勢氏「播州溝杭」とある	
97		6月18日	大館上総入道は段銭五貫二百五十文を賦課される					大館氏「摂州溝杭村」	
98	康正2年 (1456年)	—		沢良宜村内御馬免などに大館兵庫頭教氏の知行を認める		27建内文書 1「足利義政袖判御教書案」	『岐阜県史』史料編 古代・中世4	大館氏	
99	康正2年 (1456年)	—	溝杭庄を寛貞、沢良宜庄を祐識に宛行う			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』1	興福寺領 康正3年(1457年)正月25日条	
100		10月23日	興福寺慈恩会の進物支配を沢良宜庄・溝杭庄などに割り当てる						
101	康正3年 (1457年)	4月5日		沢良宜庄などに仏聖会米の支配を割り当てる					
102	長禄2年 (1458年)	閏1月1日	興福寺の七堂燈油代銭を沢良宜庄・溝杭庄などに割り当てる						
103		4月4日		沢良宜庄などに仏聖会米の支配を割り当てる					
104		11月5日	興福寺慈恩会進物の支配を沢良宜庄・溝杭庄などに割り当てる						
105		12月22日	興福寺維摩会の専寺探題威儀供を溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄などに割り当てる				『大乘院寺社雑事記』2		
106	長禄3年 (1459年)	2月23日	春日御八講法会の進物料を溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄などに割り当てる						
107		3月3日	世俗の費用を新屋庄・溝杭庄・沢良宜庄などに割り当てる						
108		2月22・23日		寺領沢良宜荘を春日社祈禱料所とし、辰市祐識に知行させる		『経覚私要鈔』	『経覚私要鈔』第5	興福寺領 「要鈔」と「雑記」にあり	
109	寛正2年 (1461年)	3月1・5日	溝杭庄を寺主寛貞に宛行う						
110		3月5日							『大乘院寺社雑事記』
111	寛正3年 (1462年)	11月12日	寺主寛貞に宛行った溝杭庄について一乗院から書状が来る			『大乘院寺社雑事記』3			

興福寺以外の領主として、溝杭庄では大炊寮領（史料 45 など）（註 6）、雅楽寮領（史料 50）、河内河合寺の祈祷領所（史料 37）、唐招提寺領（史料 43）が、沢良宜庄では近衛家領（史料 54）が、新屋庄では九条家が引き継いだ摂関家領（史料 42）などが確認できる。

またこの頃から、溝杭で本願寺関係者の活動が認められ始める（史料 40・55）。

5. 室町時代（応仁の乱以前）の様子（表 4 史料 75～111）

これまで同様、興福寺関係の史料が多く確認でき、その支配が継続していたことが窺われる。

その他、溝杭庄では長講堂領（史料 77）、陰陽頭が知行する「御祈祷料所溝杭土井跡」（史料 78・94）、隼人司領（史料 84・93）や 6 代将軍足利義教が武田信重（註 7）に扶持した大館上総入道知行地（史料 91・97）、伊勢因幡入道知行地（史料 96）、溝杭信幸が嫡子信実へ譲与した所領（史料 92）なども確認できる。摂津守護の細川氏が役夫工米についての決定を溝杭庄に伝えている史料（史料 79）もあり、大きく分けると興福寺、朝廷の官司関係、幕府関係（将軍側近）の三者の所領が存在したといえる。

沢良宜では、村内御馬免に対する大館教氏の知行が足利義政から認められている（史料 98）。

新屋庄は、興福寺以外の史料では確認できない。

6. 室町時代（応仁の乱以降）の様子（表 5 史料 108～206）

この時期からは興福寺の支配にも揺らぎが認められる。文明 11 年（1479 年）から 14 年（1482 年）にかけての摂津国人一揆では国人たちによって寺社の支配が否定される。文明 14 年に細川政元によって鎮圧されるが、寺社領の回復は困難だったようである（史料 113・118～123・125）。

ただし一定の支配は及んでいたようで、溝杭庄では文明 15 年（1483 年）に淳貞に宛行がなされ（史料 133）、沢良宜庄とともに大菜の沙汰が割り当てられ（史料 135）、文明 16 年（1484 年）には専寺探題方威儀供が進上されるなどしている（史料 141）。新屋庄は長享 2 年（1488 年）に専寺探題方威儀供が割り当てられている（史料 153）のが史料上の最後の記述となる。興福寺以外の溝杭

庄の記録は、三条中納言領の不知行庄園（史料 114）、山科家知行地（史料 215）、大館氏の知行地（史料 193・213 ほか）、溝杭亀松丸の所領（史料 202・203）、伊勢氏知行地（史料 208・216）、があり、引き続き朝廷と幕府に関連する所領が存在したようである。

ただし、不知行地（史料 114・215）や押領・年貢の遅れ（史料 193）などの記載もあり順調な支配が及んでいたとは言い難い。

沢良宜庄は、文明 10 年（1478 年）以降、近衛家と広橋家の記録に沢良宜村に関する記録が認められるようになる（註 8）。史料の残存状況の影響もあろうが、大永 6 年（1526 年）まで継続して確認できる（史料 191）。また、理覚院が沢良宜村の年貢を抵当にして借錢しており（史料 139）、所領ないし得度を有していたと思われる。

この他、荘園以外の「溝杭」に関する史料として、溝杭菊才丸・溝杭兵庫、仏照寺が貸銭を行っているもの（史料 122・129・131・136）、奈良在住の絵師、溝杭次郎左衛門（史料 116）、牡丹家肖柏の書状を三条西実隆の元に持参した連歌師の溝杭柳江（史料 184・189・190）といった人物の名前が確認できる。

また、本願寺も仏照寺（現・目垣一丁目所在）を拠点として活動している（史料 138・192 ほか）。史料上では「溝杭仏照寺」として現れることもあり、仏照寺が移転していなければ、現在の目垣周辺までを含めて溝杭として認識されていたことを示すのであろう。

7. まとめ

本稿では 16 世紀までの溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄に関する史料を集成した。興福寺領に関するものが主となったが、その他に朝廷・幕府関係の所領が存在することも確認でき、各所領が複雑に入り組んだ様相を呈していたと思われる（註 9）。

それぞれの荘園は、現在周知されている埋蔵文化財包蔵地では、溝咋遺跡・牟礼東遺跡・目垣遺跡などが溝杭庄、東奈良遺跡・玉櫛遺跡（註 10）などが沢良宜庄、総持寺遺跡・総持寺北遺跡などが新屋庄にそれぞれ相当する可能性がある。各遺跡では中世の遺構・遺物が確認されているが、史料の増加している 14 世紀後半以降の様相は不明瞭である。今後、既往の発掘調査成果の整理を通

表5 関連史料一覧（応仁3年～文明18年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宜	新屋	文献	出典	備考
112	応仁3年 (1469年)	4月10日		沢良宜庄を祈禱料所とし、辰市祐識の子に知行させる		『経覚私要鈔』	『経覚私要鈔』第8	興福寺領
113	文明2年 (1470年)	8月28日	春日御八講法会の進物料を溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄などが負担する					
114	年不詳	—	三条侍從中納言家領の不知行庄園に院御庄内溝杭がみえる			240「摂津国寺社本所領并奉公方知行等注文」	『大日本古文書家わけ第21』 蛭川家文書之2	応仁～文明年間 (1467～1486年)とされる
115	年不詳	—		摂津国内の寺社領の給分の春日社兼興福寺領として沢良宜村がみえる		241「摂津国社領并人給分等注文」		
116	文明9年 (1477年)	—	奈良在住の絵師として溝杭次郎左衛門（粟口の弟子）の名がみえる			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』6	文明9年の年末
117	文明10年 (1478年)	—		近衛家領沢良宜村		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領
118	文明11年 (1479年)	閏9月8日	摂津国人等、一揆して寺社本所の支配を否定する			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』7	興福寺領
119		12月6日		近衛家領沢良宜村 地下代官三宅出羽守、給主広橋藤堂豊後 1000疋		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領
120	文明12年 (1480年)	5月7日	溝杭庄を寫真に宛行う			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』7	興福寺領
121	文明13年 (1481年)	—		近衛家領沢良宜村御馬免		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領
122		12月25日	溝杭菊才丸が平屋・三宅窪・茨木孫右衛門への貸付分について訴え出る			『賦引付一』『銭主申五分一賦引付』	『室町幕府引付史料集成』下巻	
123	文明14年 (1482年)	4月3日	細川政元が摂津へ出陣するので、興福寺が寺領の回復を依頼する			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』7	興福寺領
124		4月7日	興福寺が細川政元に提出した寺社領に溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄などがみえる					
125		4月13日	寺務得分の寺領分に溝杭庄がみえる					
126		4月28日	摂津の興福寺領回復は困難との見通しが伝えられる					
127		5月3日	興福寺が細川政元の被官に贈物をして、寺社領の回復についての取りなしを依頼する					
128		閏7月12日	細川政元、摂津の寺社領回復の処置を定める					
129		閏7月19日	大館刑部代政重が溝杭菊才・仏照寺より借錢するが徳政を申し出る			『賦引付一』『借主申五分一賦引付』	『室町幕府引付史料集成』下巻	
130		閏7月27日	細川政元、摂津より帰京するが、春日社、興福寺としては成果なし			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』7	興福寺領
131		9月27日	仏照寺教光が寛正4年以降大館氏に貸付けた融資が未済のため訴え出る			『政所賦銘引付』	『室町幕府引付史料集成』上巻	
132	文明15年 (1483年)	1月7日	溝杭庄を北少路が所望する			『大乘院寺社雑事記』	『大乘院寺社雑事記』7	興福寺領
133		2月15日	権都維那淳貞が溝杭庄について希望を出す					
134		3月20日	溝杭庄を都維那淳貞に宛行う					
135		11月9日	興福寺の大葉の沙汰を溝杭庄・沢良宜庄などに割り当てる				『大乘院寺社雑事記』8	
136		12月18日	山崎清住庵維掌が溝杭兵庫より借錢するが徳政を申し出る			『賦引付一』『借主申五分一賦引付』	『室町幕府引付史料集成』下巻	
137		12月28日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 1000疋		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領
138		—	本願寺蓮如、富田・溝杭など各地で布教を行う			『招提寺内興起後聞書并年寄分由緒実録』	『枚方市史』6巻	本願寺
139	文明16年 (1484年)	10月25日		聖護院門跡候人金阿が沢良宜村内時末名の年貢を抵当に理覚院に融資するが訴え出る		『賦引付二』『銭主申五分一賦引付』		
140		12月28日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 500疋		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領
141		12月30日	専寺探題方威儀供を溝杭庄（都維那淳貞）などが進上する			『政覚大僧正記』	『政覚大僧正記』第1	興福寺領
142	文明17年 (1485年)	1月21日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 500疋		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領 文明16年分
143		2月5日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 300疋				
144		5月11日		辰市祐松が沢良宜庄と味舌庄の年貢を大文字屋に渡したが、原源太郎に督促される		『政覚大僧正記』	『政覚大僧正記』第1	興福寺領
145		12月30日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 400疋		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領 文明17年分
146	文明18年 (1486年)	1月28日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 300疋				
147		5月2日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 300疋				
148		—		興福寺領沢良宜庄などの年貢の記録		『政覚大僧正記』	『吹田市史』第4巻	興福寺領
149		12月24日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 14貫文		『雑事要録』	『吹田市史』第4巻・湯川2005	近衛家領

表6 関連史料一覧（文明19年～大永4年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宜	新屋	文献	出典	備考	
150	文明19年 (1487年)	—		興福寺領沢良宜庄などの 年貢の記録		『政覚大僧正記』	『吹田市史』 第4巻	興福寺領	
151	長享2年 (1488年)	6月2日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 700疋		『雑事要録』	『吹田市史』 第 4巻・湯川2005	近衛家領 文明19年分	
152		—		興福寺領沢良宜庄などの 年貢の記録		『政覚大僧正記』	『吹田市史』 第4巻	興福寺領	
153		12月16日	専寺探題方威儀供を溝杭庄 松）などに割り当てる	（都維那淳貞）・新屋庄・沢良宜庄（辰市祐 松）などに割り当てる		『政覚大僧正記』	『吹田市史』 第4巻		
154		12月29日		辰市祐松が沢良宜庄分が 全て未納であることを報 告する		『政覚大僧正記』	『政覚大僧正 記』第2		
155	長享3年 延徳元年 (1489年)	2月1日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 600疋		『雑事要録』	『吹田市史』 第 4巻・湯川2005	近衛家領 長享2年分	
156		2月27日		近衛家領沢良宜村 近衛房嗣領所 500疋				近衛家領 延徳元年分	
157		3月4日		近衛家領沢良宜村 500 疋				興福寺領	
158	延徳2年 (1490年)	4月8日	寺務権別当世俗の費用を溝杭庄・沢良宜庄などに割 り当てる			『大乘院寺社雑事 記』	『大乘院寺社雑 事記』9	興福寺領	
159		12月26日		近衛家領沢良宜村 300 疋		『雑事要録』	『吹田市史』 第 4巻・湯川2005	近衛家領	
160	延徳3年 (1491年)	12月28日		近衛家領沢良宜村 500 疋					
161	延徳4年 (1492年)	12月28日		近衛家領沢良宜村 500 疋					
162	明応3年 (1494年)	5月14日		近衛家領沢良宜村 500 疋				近衛家領 明応2年分	
163	明応4年 (1495年)	2月7日		近衛家領沢良宜村 400 疋				近衛家領 明応3年分	
164	明応5年 (1496年)	2月15日		近衛家領沢良宜村 500 疋				近衛家領 明応4年分	
165	明応6年 (1497年)	3月11日		近衛家領沢良宜村 400 疋				近衛家領 明応5年分	
166		12月29日		近衛家領沢良宜村 500 疋				近衛家領	
167	明応7年 (1496年)	—		近衛家領沢良宜村 実門 罷下路銭上下分 30疋				近衛家領 明応7年分	
168	明応8年 (1499年)	2月9日		近衛家領沢良宜村 400 疋				近衛家領	
169		12月28日		近衛家領沢良宜村 200 疋陣夫について子細あり				近衛家領 明応8年分	
170	明応9年 (1500年)	4月20日		近衛家領沢良宜村 100 疋				近衛家領 明応9年分	
171		12月23・ 29日		近衛家領沢良宜村 23 日300疋・29日100疋				近衛家領	
172	文亀元年 (1501年)	4月2日		近衛家領沢良宜村 100 疋				近衛家領	
173	文亀2年 (1502年)	8月10日		沢良宜村代官について広 橋から申し送りあり		『後法興院記』	『後法興院記4 洞院公定公記』	近衛家領	
174	文亀3年 (1503年)	—		近衛家領沢良宜村 未納		『雑事要録』	『吹田市史』 第 4巻・湯川2005		
175	文亀4年 永正元年 (1504年)	12月29日		近衛家領沢良宜村 300 疋					
176	永正2年 (1505年)	1月29日		近衛家領沢良宜村 100 疋					
177		12月29日		近衛家領沢良宜村 400 疋		『守光公記』	『守光公記』1	広橋家領	
178	永正5年 (1508年)	9月14日		馬免について三宅出羽守 より請文が届く					
179		9月15日		昨日の馬免請文を近衛尚 通が北小路俊泰に申し入 れる		『後法成寺関白記』	『後法成寺関白 記』1	近衛家領	
180	永正8年 (1511年)	12月3日		細川弥九郎に馬免のこと について申し入れる					
181		12月6日		細川弥九郎が馬免の賦を 持参する		『後法成寺関白記』 永正9年冊紙背文書 2・11	『守光公記』2	近衛家領 173の書状か	
182	永正9年 (1512年)	—		沢良宜村御馬免について の書状					
183	永正12年 (1515年)	2月8日		摂津(沢良宜庄)より今年 初めての米銭が到着する		『守光公記』	『守光公記』2	広橋家領	
184	永正12年 頃	—	溝杭柳江の連歌が掲載され る			『春夢草』	『続群書類従』 第36輯 補遺部	興福寺領 『摂津市史』では 9日	
185	大永2年 (1522年)	3月11 日・23日	溝杭庄を淳貞寺主、沢良宜庄を尊貞寺主へ宛行う			351『経尋記』	『吹田市史』 第4巻	興福寺領 『摂津市史』では 9日	
186	大永3年 (1523年)	6月22日	山科五百住屋正善が溝杭見 性寺対知に貸し付けるが未 済のまま死去、弟子も返却 未履行と訴え出る			『別本 賦引付四』	『室町幕府引付 史料集成』 上巻	近衛家領	
187		11月21日 12月5・ 19日		近衛家領沢良宜村 1石 9斗4升+9斗8升		『雑々記』大永三年 記	『後法成寺関白 記』4		
188	大永4年 (1524年)	11月23日 12月20 日・28日		近衛家領沢良宜村 御馬 免 9斗8升+30疋+4 斗7升5合		『雑々記』大永四年 記			

表7 関連史料一覧（大永5年～永禄12年）

番号	年号	月日	溝杭	沢良宜	新屋	文献	出典	備考
189	大永5年 (1525年)	8月13日	溝杭柳江、肖柏の書状を持参する			『実隆公記』	『実隆公記』 巻6ノ下	
190		9月27日	溝杭柳江、下国の挨拶に訪れる					
191	大永6年 (1526年)	6月		広橋家の所領目録に沢良宜庄が認められる		『神宮祭主藤波家旧蔵文書』ト号「広橋家所々知行分目録」	藤本1987	広橋家領
192	天文9年 (1540年)	2月2日	斎の喚候衆に溝杭の仏照寺が認められる			『天文日記』	『大系真宗史料』文書記録編8 天文日記Ⅰ	本願寺
193	年不詳	11月25日	茨木長隆が大館尚氏の知行する溝杭庄について善処する旨を伝える			『大館常興日記』	『大館常興日記』3	大館氏 天文9年(1540年)7月記紙背文書
194	天文10年 (1541年)	10月23日	溝杭庄の年貢について、代官三宅に催促する				『大館常興日記』2	
195	天文10年 (1541年)	11月16日	溝杭庄の年貢米を代官三宅が八幡まで運ぶが、路次が悪く滞留するとの連絡が入る				『大館常興日記』3	
196		4月22日	溝杭庄へ年貢催促の使者を下す					
197	天文11年 (1542年)	6月26日	当番の仏照寺が榊を持参する			『天文日記』	『大系真宗史料』文書記録編9 天文日記Ⅱ	本願寺
198		11月19日	斎に仏照寺が出席する					
199	天文13年 (1544年)	2月2日	斎の相伴に仏照寺が認められる					
200	天文13年 (1544年)	4月11日	溝杭仏照寺で新年忌			『私心記』（東大本・堺本）	『大系真宗史料』文書記録編10 私心記	本願寺
201		6月26日	当番の仏照寺が榊を持参する			『天文日記』	『大系真宗史料』文書記録編9 天文日記Ⅱ	
202	天文14年 (1545年)	8月26日	室町幕府が、溝杭亀松丸の溝杭村内の本領および散在田畠の知行を安堵する			260「茨木長隆領知証状写」	『大日本古文書』家わけ4石清水文書之1	溝杭氏
203						261「茨木長隆沙汰状」		
204	天文15年 (1546年)	2月2日	斎の相伴に仏照寺が認められる			『天文日記』	『大系真宗史料』文書記録編9 天文日記Ⅱ	本願寺 傍注に「宝来」
205	天文16年 (1547年)	2月2日	斎の相伴に仏照寺が認められる					本願寺 傍注に「ミノ」
206		12月21日	当番の仏照寺が榊を持参する					本願寺
207	天文17年 (1548年)	2月2日	斎の相伴に仏照寺と溝杭の浄専が認められる					本願寺 傍注に「ミノ」
208	年不詳	—	伊勢貞信知行分として溝杭がみえる			618「伊勢貞孝并被官等知行目録」	『大日本古文書』家わけ第21巻川家文書之3	伊勢氏 天文18年～21年3月の間とされる
209	天文18年 (1549年)	8月23日	当番の仏照寺の代わりに浄専が榊を持参する			『天文日記』	『大系真宗史料』文書記録編9 天文日記Ⅱ	本願寺
210		2月2日	斎の相伴に浄専が認められる					
211	天文20年 (1551年)	3月5日	金龍寺へ花見に行き、昼に溝杭仏照寺で休憩する					
212						『私心記』	『大系真宗史料』文書記録編10 私心記	
213	天文21年 (1552年)	2月12日	室町幕府内談衆の大館晴光の知行分に溝杭庄などがみえる			「大館晴光知行目録案」『石清水文書』	『大日本古文書』家わけ4石清水文書之6	大館氏
214	天文22年 (1552年)	11月10日	当番の仏照寺浄専が榊を持参する			『天文日記』	『大系真宗史料』文書記録編9 天文日記Ⅱ	本願寺
215	永禄12年 (1569年)	3月3日	山科家知行分に「溝杭卅石」が不知行としてみえる			『言継卿記』	『言継卿記』第4	山科家領
216		10月15日	伊勢因幡入道に安堵した所領に「溝杭村地頭名半分」がある			199「伊勢因幡入道宛安堵状案」	奥野1969	伊勢氏

じて、このギャップを埋める資料を見出すことにより、より詳細な歴史の復元が可能となってくるだろう。

註

- 1) この3つの荘園を対象としたのは、興福寺領としてまとめて記載されていることが多いためである。ただし、後述するように興福寺領以外にも多くの領主の存在が確認でき、それらについても確認し得た

限り集成を行った。また、「荘園」と「～庄」の表記が混在しているが、個別の荘園の場合に「～庄」とした。

- 2) 「荘園」以前としたが、「～庄」の名称で史料に認められる以前ということであり、溝杭庄が史料3の功田施入時点から古代荘園であった可能性を否定するものではない。
- 3) 三嶋別業は史料15で「草和良宜村」が「不沽田」とされているなどのことから沢良宜に所在したと考

えられている（菱田 2017、吉川 2009・2024）。

- 4) 藤原仲麻呂によって父祖（藤原鎌足・不比等・武智麻呂）の顕彰がなされている（仁藤 2021）。功田についても鎌足を顕彰するために付託された可能性もあろうか。
- 5) 「外家の所領」について河音能平氏は資兼の母が「おそらく、摂津国溝杭郷の在地の富豪＝名望家の娘」と考えられ、溝杭資兼は「母方の家の所領を相伝することによって溝杭郷に居住し、溝杭大夫と称したものと考えてよいのであろう」とされている。また、溝杭氏は次第に「典型的な開発領主＝武士団に転身し」、12 世紀中葉から後半の鳥羽・後白河院政期にその所領を院に寄進し、皇室領溝杭荘下司となったと考えられている（河音 2011）。
- 6) 今回、『師守記』にみえる「嶋下仕女」も取り上げているが、橋本義彦氏は一覧表で分けて記載されており（橋本 1976）、溝杭荘とは別の荘園であった可能性もある。
- 7) 武田信重は、甲斐守護である。応永 23 年（1416 年）～24 年（1417 年）に起こった上杉禪秀の乱の影響で甲斐から没落していたが、応永 30 年（1423 年）に甲斐守護に補任される。ただし、甲斐国内に反発する国人らがおり、帰国できなかった。この間の扶持領として与えられたのが史料 91 の溝杭荘である。幕府（足利義教）と鎌倉府（足利持氏）との対立が激化して永享の乱（永享 10 年（1438 年）～11 年（1439 年））が勃発すると鎌倉府に対するために帰国している（磯貝 2010）。
- 8) 広橋家は武家伝奏を務めた家柄である。近衛家に仕えていたことや、史料 114 から、近衛家領と広橋家領は同一の所領を指すと考えられる。
- 9) 今回表に示した以外の史料として、江戸時代の編纂である『寛政重修諸家譜』巻 279 では、小早川秀秋に仕えた平岡頼勝が溝杭氏の系譜を引いており、祖父の重頼、父の頼俊が溝杭郷七村を領すとされる。また頼勝も溝杭で生まれたと記されている。また、『大阪府全志』の溝杭村大字馬場溝咋神社の項に文明 9 年に領主溝咋兵庫介質信が社殿の再建を行ったとされる。ただし、「質信」は系図などで確認できず、また社殿の修理についても関係する史料は確認されていない（東野 2020）。
- 10) 東奈良遺跡・玉櫛遺跡に関しては、今回は取り上げていない「水尾村」が位置する可能性もある。

参考文献

史料

- 青木和夫ほか 校注 1992『続日本紀』三 岩波書店
石附敏幸 2011「国立公文書館所蔵『文保三年記』」
『千葉大学人文研究』第 40 号 千葉大学人文学部
pp. 145-184
井上正雄 1922『大阪府全志』巻之三
茨木市 2003『新修茨木市史』第四巻 史料編 古代・中世
沖森卓也ほか 1999『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂 伝 注釈と研究』吉川弘文館
奥野高広 1969『織田信長文書の研究』上巻 吉川弘文館
岐阜県 1973『岐阜県史』史料編 古代・中世四
櫛木謙周 2014「新修茨木市史 第四巻 補遺」『新修茨木市史年報』第 12 号 茨木市 pp. 23-75
宮内庁書陵部 1971『圖書寮叢刊 九条家文書』一
桑山浩然 校訂 1980・1986『室町幕府引付史料集成』上巻・下巻
国書刊行会 1915『言継卿記』第 4
真宗史料刊行会 2015・2017『大系真宗史料』文書記録編 8・9 天文日記 I・II 法藏館
真宗史料刊行会 2016『大系真宗史料』文書記録編 10 私心記 法藏館
吹田市役所 1976『吹田市史』第 4 巻
摂津市役所 1984『摂津市史』史料編一
続群書類従完成会 1959「清辨眼抄」『群書類従・第七輯』公事部
続群書類従完成会 1959「康正二年造内裏段銭并国役引付」『群書類従・第二十八輯』雑部
続群書類従完成会 1962『実隆公記』巻六ノ下
続群書類従完成会 1964『寛政重修諸家譜』第 5
続群書類従完成会 1969「招堤千歳伝記 巻下之三」封禄篇『続々群書類従 第十一』
続群書類従完成会 1969～1976『師守記』第三・六・七・八・十
続群書類従完成会 1972「春夢草〔補遺〕」『続群書類従・第三十六輯』拾遺部
続群書類従完成会 1982「至徳二年記」『続群書類従・第二輯上』神祇部
続群書類従完成会 1983「興福寺三綱補任」『続群書類従・第四輯下』補任部
続群書類従完成会 1987「満濟准后日記 下」『続群書類従・補遺一』

続群書類従完成会 1989・1995『政覚大僧正記』第一・二
 続史料大成刊行会 1967『後法興院記四 洞院公定公記』臨川書店
 続史料大成刊行会 1967『大館常興日記』二・三 臨川書店
 内外書籍 1936・1938『康富記』一・三
 東京大学史料編纂所 1909・1915『大日本古文書』家わけ四 石清水文書一・六
 東京大学史料編纂所 1984・1987『大日本古文書』家わけ第二十一 蜷川家文書二・三
 東京大学史料編纂所 1908『大日本史料』第六編之七
 東京大学史料編纂所 1930・1940『大日本史料』第七卷之三・八
 東京大学史料編纂所 1988『岡屋関白記』岩波書店
 東京大学史料編纂所 2001・2011『後法成寺関白記』一・四 岩波書店
 東京堂 1963『平安遺文』古文書編 第四卷
 東京堂出版 1972～1989『鎌倉遺文』古文書編第2・5・10・13・18・20・23・29・38・40 卷
 同朋舎 1974「常楽台主老納一期記」「存覚袖日記」『真宗史料集成』第一卷 親鸞と初期教団
 枚方市役所 1968『枚方市史』第六卷
 藤本元啓 1987「神宮祭主藤波家旧蔵文書の紹介－伊勢神宮関係文書と広橋家知行地関係文書－（下）」『皇學館大學史料編纂所報 史料第90号』皇學館大學史料編纂所 pp. 5-7
 箕面市役所 1968・1972『箕面市史』史料編一・二
 八木書店 1985・2012『経覚私要鈔』第五・八
 八木書店 2018・2020『守光公記』第1・2
 大和郡山市教育委員会 1984『大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書』
 吉川弘文館 1971『日本書紀』後篇 新訂増補国史大系 第1巻下
 吉川弘文館 1981『春日大社文書』第二卷
 吉川弘文館 1999『扶桑略記 帝王編年記』新訂増補国史大系 第十二巻
 吉川弘文館 2001『尊卑分脉』第三篇 新訂増補国史大系 第六十巻上
 吉川真司 2004「安祥寺以前－山階寺に関する試論－」『安祥寺の研究 I－京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院－』京都大学大学院文学部研究科 pp. 115-127
 臨川書店 1978『大乘院寺社雑事記』1・2・3・6・

7・8・9

論文ほか

磯貝正義 2010『武田信重』戎光祥出版
 金井静香 1999「近衛家所領目録とその後」『中世公家領の研究』思文閣出版 pp. 259-272（初出：1996）
 金井静香 1999「広橋家領の構成と相続」『中世公家領の研究』思文閣出版 pp. 273-296（初出：1997）
 河音能平 2011「中世前期北摂武士団の動向」『中世畿内の村落と都市』文理閣 pp. 108-150
 櫛木謙周 2010「大門寺一切経にみる社会関係」『新修茨木市史年報』第八号 茨木市 pp. 1-22
 柴田真一 2012「永正期の広橋家領について－「守光公記」の記事を中心として－」『地域文化の歴史を往く－古代・中世から近世へ－』和泉書院 pp. 138-157
 摂津市 2022『新修摂津市史』第1巻
 高岸輝 2008「視覚の革新－絵巻に見る土佐光信の新様式－」『室町絵巻の魔力－再生と創造の中世－』吉川弘文館 pp. 138-157（初出：2008）
 鶴崎裕雄・湯川敏治 2009「戦国期摂津国における近衛家領」『なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2008』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター pp. 23-39
 仁藤淳史 2021『藤原仲麻呂－古代王権を動かした異能の政治家－』中央公論新社
 橋本義彦 1976「大炊寮領について」『平安貴族社会の研究』吉川弘文館 pp. 211-233（初出：1972）
 東野良平 2020「第三章三 溝咋神社」『茨木市歴史的建造物調査報告書』I 神社編 茨木市教育委員会 pp. 56-61
 菱田哲郎 2017「東奈良遺跡出土の埴」『茨木市立文化財資料館館報』第2号 茨木市立文化財資料館 pp. 11-12
 日野照正 1986「摂津国における初期真宗の展開」『摂津国真宗開展史』同朋舎 pp. 5-37
 湯川敏治 2005「近衛家領の家産経済の記録－『雑事要録』『雑々記』について－」・「公家領荘園の運営機構－近衛家領の荘官をめぐる－」『戦国期公家社会と荘園経済』続群書類従完成会 pp. 121-152、207-236（初出：1982・1986）
 吉川真司 2009「藤原鎌足と三島別業」『藤原鎌足と阿武山古墳』茨木市・茨木市教育委員会 pp. 31-37
 吉川真司 2024「古代荘園の歴史」『古代荘園』奈良時代以前からの歴史を探る 岩波書店 pp. 23-85